巻頭言

バーチャルリアリティーと教化

（日蓮宗現代宗教研究所長）　田澤元泰

先日、映画「硫黄島からの手紙」を観ました。戦場での兵士の恐怖と怒りと、指揮する者の混乱による全体の見えない悲劇が克明に描かれていて、大変重い映画でした。特に印象的だったのは、アメリカ海兵隊の上陸戦闘場面や、負傷した兵隊の姿でなく、観客に向って飛んでくるような弾丸の音が非情にリアルで、見るものに痛みを感じさせるほどでした。その感じは私のみならず、一緒に見ていた同僚達も同じ印象を受けたようでした。監督のクリント・イーストウッド氏のこだわりかもしれませんが、戦場を知らない私には、新鮮な怖さを与えてくれました。戦争は、国際政治の戦略的な側面から論じられる前に、現実の悲惨さを前提にした議論をすべきだと思いました。

最近になって、記号着地問題という課題について知りました。コンピューターの世界の、人工知能についての問題です。人間は花を見たときに、過去の記憶からその情報と見比べて花と判断します。コンピューターにも、同じことは出来ます。次に、その花の枯れた花びらを見たときに、花と認識をしますが、コンピューターではゴミと認識します。さらにコンピューターの情報に花の枯れた部分まで登録することによって、花と認識することが出来る

ようになります。しかし、新種の花を発見したときには、人間は始めて見るその花を、新種ではあっても花と認識をします。しかしコンピューターでは、花とは認識できず、解析不可能との答えが返ってきます。この違いはどこからくるのか、人間はどのようなプロセスで認識するのか、といったことを追求する分野での研究課題の一つとして、記号着地問題というのがあります。

私たちが法華経を拝読するときには、この記号着地問題で扱われようとしている分野の能力がフルに活用されていなければ、到底受けとめることはできません。それはバーチャル・リアリティーといわれている仮想現実とは異なります。仮想現実は、現実にはありえない世界を、あたかも現実の如くに表現することをいいます。ところが私たち自身が法華経や宗祖が説かれているみ教えについて、現実的に受け止めることが難しくなって、さらには現在の人々にひろく受け入れられている「科学」で検証された上での事実をもとに積み重ねてゆく価値観では対応できないものと判断して、法華経の世界をこのバーチャルな世界に位置づけ、仮想現実な世界として説き示そうとしてはいないでしょうか。さらに最近「擬似科学」という問題が提示されています。ある現象について、科学として認められない方法で探求しようとしながら科学として扱おうとすることに対して、「擬似科学」として批判しています。たとえば、血液型による性格の分類、水の結晶の形と人間の発する言葉との関係など、その範疇は多岐にわたるようです。従来の「科学」では扱えない世界を、「科学」的なスタイルにて扱い、結局は中途半端に結論づけてしまう危険は、十分に用心しなくてはなりません。しかし我々が求め続けてきた世界に対して、安易に科学的思考を取り入れようとして、結果と

して「擬似科学」という範疇に押しやられてしまう危険もあるのではないでしょうか。それだからといって、布教教化という事柄を、心理学的範疇に位置づけて科学的探究の対象としたり、ある地域の寺院数によってその地域の教化の浸透度の指標としたりすることは出来ません。それぞれの分野での学問の方法ではあっても、われわれが求めるものとは異なります。

インド哲学、仏教学、法華経学、日蓮教学、宗教学、宗教社会学、文化人類学、心理学などなど、私たちの布教に関わる学問として、これまでも多くの分野で、問題提起とそれにもとづく膨大な論説が展開されてきました。それぞれの学問は、今後も科学の方法として積み重ねられ、将来へむけて仮説と提案が行われてゆくことでしょう。しかし、法華経への信仰が、宗祖から今日へと脈々と多くの人を救い導いてきたとの実績の上から、現在の日蓮宗教師一人一人の教化の現場につながるべき、もっと直接的な理論、かつ実践的な学問の構築が求められているのではないでしょうか。それが、「教化学」の求められる所以でもあります。

さて、今日私たちが直面する数々の社会問題の中で布教教化を行う場合に、何を根拠に布教を展開するかを問われることがあります。それは、法華経・ご遺文のどこに示めされているかといったことを求められることです。他の宗教や宗旨はともかく、日蓮聖人の教えを受けとめ伝えてゆく私たち日蓮宗僧侶にとっては、法華経・ご遺文の原典の字句や文章にすべて基づくことが絶対必要条件なのでしょうか。何を根拠に布教教化をするのかと尋ねられれば、己の信仰に基くとしか言いようがないのではないでしょうか。もちろんそれを裏付けるために、法華経やご遺文を都合よく読み違えることは許されるものではありません。ただし

それは、あくまでも自分の信仰の世界のことであります。また、憲法問題、世界平和問題、環境問題、生命倫理問題などに対して、法華経やご遺文は何も語っていないではないか、なぜなら釈尊、日蓮聖人在住の時代には問題とされていなかったという疑問をもつ人がいるかもしれません。しかし私たちは、釈尊や宗祖はすでにそうした問題にたいする解決は示されていると考えます。なぜなら、私たちとは社会に対する捉え方が桁違いに大きく、現在の言葉での表現はされていないものの、そうした問題を包含する次元での教示はいたるところにあるからです。日蓮聖人にとって「憲法問題」は、当時には存在しない現在の問題ですが、ともに生きる人々の安穏なる世界を顕現するために、『立正安国論』にて示されたそのご精神から、何を優先させるかは、おのずから判断できるものであります。

問題は、こうした現代社会の問題が、信仰では直接扱えないものと判断してしまい、バーチャルな世界として受け止めてしまうことにあります。それは、かつては無かった問題です。バーチャルという世界観が生じたことから発生した問題として、われわれ僧侶も蝕みつつある、かなり重大な問題として捉える必要を感じます。先ほど話した、映画の戦場での弾丸のシーンは、実写ではなく、コンピューターにて作られたものです。しかし、それは実際に起こっている現実の世界を表現しているのであり、人が斬られても傷が治ってすぐに立ち上がる、実際にあり得ないことを表現するバーチャル・リアリティーとは全く違うことだ、と認識することが大切なのです。

法華経にて示されていること、日蓮聖人が説かれていることは、実際のことなのですから。